

# 大乘佛教について

——その精神史観への一試攷——

山口 益

## 大乘と小乗

大乘佛教といえは、小乗佛教とは別に、大乘佛教というものがあるように考えられているようである。そして日本の佛教者の間では、ややもすると、中国や日本などの北方佛教は大乘佛教であるが、セイロン、ビルマ、シャムなどのいわゆる南方佛教は、小乗佛教である、というようなことが、かりそめにもいわれているようである。一体、小乗佛教という小乗とは、サンスクリットでの *hina-yana* という語で、それは、「劣った低俗な道」というような意味になるのであるが、それについて三十五年余り以前、私がフランス留学中にその学恩を蒙った、近代フランスの東洋学界での、インド学佛教学の碩学シルヴァン・レイヴィ先生の話を憶い出す。それは、先生が或時、南方佛教圏内の或人に、「日本では南方佛教のことを小乗佛教と呼んでいる」といわれたら、南方佛教圏内のその人は、大腹を立てて真赤になって憤慨した。であるから、そういう考え方、言い方は、慎しむべきである、ということであった。旁々現在の国際学界では、南方佛教のことを、「Thera-vada-Buddhism: 尊敬すべき先輩たちを経て伝承せられている佛教」と称せられている。それは、尤もな呼び方であると思われる。

尤も歴史上において、或る佛教の流派が小乗佛教と呼ばれ、或る教えの流派が大乘と称せられたことはあった。そ

のことは史伝の上にも見られるのである。しかし大乘小乗ということの源の意味は、佛教の真理が究極的に実践せられていった道が大乘であり、そこまで究められずに中絶し、或る点で固定してしまったようなのが、小乗であるといわれることになるのである。私はそういう点を、釈迦牟尼佛陀の伝記の上で跡づけることが出来ると思う。

### 釈迦牟尼の正覚

釈迦牟尼佛陀の伝記——以下佛伝と略称する、——その佛伝の誌す処によると、釈迦牟尼佛陀は六年に亙る修行の苦闘を経て、三十五歳の十二月八日の未明に、正覚さとりに到達せられた、という。

正覚とは、人間の迷妄と対蹠的にいわれることであって、われわれは何時いつも、「これは私だ、それは汝だ。これは私の物だ、それは汝の物だ」というように、自分の我中心がに心が動いて、人よりも先ず自分を大事に思い、人の物よりも自分の物を大切にしてそこに愛着を起し、それがうまくいかない時には、瞋いかりにくらみ憎にくらみ怨にくらみが起る。わたしたちには、そういう心が幾重にも幾重にも、もつれ合して、今日は仲よしになって馴れむつんでいるか、と思うと、明日は仲違ちがいをし、いさかいを起したり、などして、まことに猥雑な姿を露呈している。それは何としても汚穢けがれであり、汚穢の故に盲いた姿のくらがり・暗黒であり、暗黒の中なかにうごめきうろろうしているところの迷妄である。

それで、「これは私だ、それは汝だ、私の物だ、汝の物だ」というような私の心が動かぬようにし、私だ汝だ、私の物だ、汝の物だとするような、我に基もとづいた二元的に固定している相對の姿を離れねばならない。それを離れた処に無我の境地において絶対者としての迷妄でない本當の眞実が顯あらわれる。迷妄でない本當の眞実がその人格に顯あらわれたい人が、サンスクリットでいうところの Buddha である。日本語で言えば、覺さつた人である。

ゴータマ・シツダルタ太子が、三十五歳の十二月八日、すなわち臘月八日、禪家で臘八接心という臘八の明け方にそういう佛陀となられた、ということは、世界文明の歴史から言いって、大きな出来事であつた。そのことは世界的な観点から、度々注意せられているのである。

たとえば、十四世紀の初めに、二十年間、支那中国に滞留した伊太利人マルコ・ポーロは、西ヨーロッパの知識人

として初めて東洋世界を知った人であろうが、彼は東洋世界の佛教事情に強く印象づけられて、「キリスト教以外にも、人類救済のために一身を捧げた一大聖者の宗教のあることを知らねばならない」という結論に達した、という。キリスト教世界以外の東洋世界に於いて、佛教が人類救済の役目を果たす世界宗教として行われていた、ということには、西ヨーロッパの人にとっては、驚くべき事柄であつたのであろう。

また先に一言したフランスにおける近代のインド学者シルヴァン・レヴィ先生は、その平生の言葉として、「キリスト教なしには西洋の文化はなく、マホメット教なしに近東の文化がないと同様に、佛教を差置いて極東の文化は理解せられない」と、言い切られたのであつたが、そういう極東の文化の髓をなす佛教は、実にゴータマ・シッダルタ太子が三十五歳の十二月八日の未明に正覚に到達したということによって、歴史の第一歩を踏み出したのであつた。それ故にゴータマ・シッダルタ太子が正覚に到達したということは、世界文明の歴史から言つて、まことに大きな出来事であつた。

#### 四七日に互る三昧

しかしそれだけで、釈迦牟尼佛陀の佛教が完成したということではない。正覚を開いたということだけで「佛陀」ということが成就したのではない。そのことは、佛陀の伝記の次に続く事跡が物語っている。それを簡単に述べるとこうである。

釈迦牟尼佛陀は人も知る如くブドガヤの菩提樹の下で正覚に到達して、そのままその座で七日間、そこに端坐して深い三昧を続けられた。それは正覚に到達された、その正覚の味をそこですっかりとかみしめられたということである。それからそこを去って、遠からぬ処にある大きな無花果の樹下で、また七日間坐禅三昧に入られた。そこで第二の週間を過されると、また、そこを去って別の樹の下へ行って坐禅三昧して第三の七日間を過された。その第三週間を過ぎると、佛陀はそこを発つて、また別の樹の下へ行って坐禅三昧して第四の七日間を過された。佛陀はそのように、それぞれの樹下で坐禅三昧されたが、最後に、先に第二の七日間に坐禅三昧せられた無花果樹の下へ復た戻つて静

かに黙想に入られた。が、そのとき佛陀は、或る絶望のどん底に落し入れられた想いであった。經典に佛陀のその時の想いを誌して次のようにいう。

「私は、ようやく正覚に到達して、愛着と憎怨とのからまりの染穢・暗黒・迷妄を脱れ出たので、何とかして、この正覚の意味を一般の人々にも聞いてもらい、凡ての人々が、この正覚の世界に入るならば、と考えた。しかし、愛着と憎怨とのからまりの巢窟に鎖こめられている人々に、この正覚の意味を説きほぐして理解させることは、考へても考へても難しい。それを説きほぐそうとすれば、却って、染汚と暗黒と迷妄との中に、逆に流れこんでしまう場合すらあるであろう。そうなると、正覚の意味を説きほぐして理解させようとするのは、徒らに自分が疲労・困憊・喪失するばかりであるから、一層のこと、説くことを断念し、説法することをあきらめて、自分で自分の正覚の境地を静かに味い楽しんでいよう。それより仕方はないであろう」ということであつた。

### 梵天の勸請

ところがその時、印度民族の崇める神々の代表者、言い換えれば、当時の娑婆世界の主という資格の梵天という神様が、佛陀の胸の中に、そういう絶望感が、きざして来たことを勘ずいて、「そういうことになつては、この世界の大変な腐敗と破滅との他ないであろう」と憂えて、神様の居処から姿を隠して佛陀の前に顕われて、「世間の中には、あなたの法話のわかる聰明な者もおります。どうか説法不可能などとあきらめてしまわずに、説法を御始め下さるよう」と勸請した。佛陀はその無駄であろうことを述べて躊躇されたが、梵天の再三再四に互る説法の勸請にほだされて、説法の開始に踏み切られた、ということである。

### 三昧、梵天の勸請、 説法開始までの意味

茲に、佛陀のその正覚から説法に至るまでの内心の苦闘の程が述べられている。

説法によって、正覚の意味が人類のものになるか、ならないか、ということとは、佛陀の正覚が実効を奏するか奏しないかという、佛陀の正覚の価値が試練をうけているということである。その試練の中で佛陀は、四週間の坐禪三昧をかけて、坐を変えてみても坐を変えてみても解決の道に到達することが出来ないという苦闘

の中を彷徨した。そうして到達した処は、その正覚が実効を奏しない、という説法不可能の絶望であった。絶望したけれども、しかし、絶望するに絶望し切れないものは、娑婆世界の代表者である梵天による説法の勧請であった。それは、人類世界の代表者によつての、「説法によつて全人類が救済されねばならぬのではないのか。」という全人類救済の要請である。その要請を無視して敢えて佛陀が三昧に耽つて、独り自らの正覚の味を楽しんでいる、ということになれば、佛陀は佛陀であらうけれども、そういう佛陀は、「自分のためにのみ迷妄を脱れて、隱遁生活をいとむ或る一人の佛陀」、「すなわち、a Buddhaということ、the Buddhaということにならない。そこに、小乗の正覚が発生する。小乗佛教などいうものが大乘佛教と並んで、始めから別にあるというようなことではないので、正覚が実効を奏しない処に、小乗佛教は発生するのである。

### 本願・菩薩の行

それで、四週間の坐禪三昧と、梵天による説法の懇願、説法の勧請によつて、佛陀が説法すべく踏み切るに至つたという、佛陀伝記の事跡は、佛教が人類の宗教としての、大乘として成立するか、しないか、という大きな問題がそこに胚胎せられているのである。そうして、佛陀の伝記の事跡が胚胎している思想こそ、大乘佛教の上で、佛の本願ともいい、より具体的には、菩薩の行ともいわれるものの、源の形態である。実に菩薩とは、佛陀がまさしく「人類の救済」という、「佛陀の正覚の実効」が試練せられている態であつて、佛道ということの中の最も峻しい姿をいうのである。

つまり、佛陀の本願によつてこそ、菩薩の行によつてこそ、佛陀の正覚が人類のものときれるのである。別の言い方をすれば、佛陀の正覚とは、人間の暗黒迷妄を克服したのであるから光明であり智慧であるが、佛陀の説法とは、佛陀の正覚の智慧が、人間の上に、どうしても流れ出ねばならずして人間の上に流れ出たものである。すなわち説法は佛陀の智慧の必然的な成果である。その流れ出る経路において、佛陀にあつては、言うに言えない苦悶を経過したものの、浄土教流の言葉でいう、佛様の御苦勞を経たものであるが、人間の上で言えば、それによつて、人間が正覚の

世界へ導き取られねばならぬことになるのであるから、人間にとっては、それが佛陀の慈悲である。そのように、正覚の智慧から人間が救済せられる説法としての慈悲へとという動向・智慧から慈悲への内面的な展開、それを佛の本願といい、菩薩の行ともいう。正覚の智慧から、本願の慈悲による説法が、佛の御苦勞の成果として成立する処に、佛陀は本真の佛陀として完成し成就する。そういう佛陀のあり方を如来という。如来とは、正覚というまこと、それを真如というが、その正覚なる真如から、佛陀の慈悲が、説法という教として人間の世界へ到来し、すなわち、如来から来ることになり、それによって、人類の救済せられる事情が出来上ったものである。それが如来である。そのようになつたのが大乘佛教である。

## 大乘經典

正覚の智慧から人類救済の慈悲へ、という佛陀本願の動向、すなわち大乘佛教は、多くの大乘經典といわれるテキストの中に展開せられていたまさしくの内容である。そういう大乘經典は、釈迦牟尼佛陀以後、釈迦牟尼佛陀を敬仰する人々が、佛陀の心の中にゆり動いた本願の精神の姿に、繰返し繰返し念を致し、その本願の精神に強く深く印象されていた印象記録である。大乘經典とは、本願が人間に印象された印象記録である。尨大な数に上る大乘經典が、そのように、人間世界の言葉であるテキストとして記録せられていった、という事は、釈迦牟尼佛陀の精神が、人々の上に、云何に、たゆみなく浸透していったものであるか、を物語っている。

## 異民族の文化の浸透と佛教→世界宗教

それらの經典が記録せられていったと想像される時期の間、インドの世界には、先にはアレキサンダー大王のインド侵入に始まるギリシャ植民地の建設があり、紀元後にはまた、

西北インドが、イラン系民族のクシャナ王朝の制覇によって、イランの文化に強く影響せられた、ということがあった。佛教インドは、度々それら異民族の文化の侵入にさらされた。異民族の文化の侵入にさらされながら、しかも佛教インドは、異民族の文化を異端邪説として、それを毛嫌いし敵視することなく、それらの文化的要素をおうらかに採り容れた。それによって異民族の文化は却って佛教に影響せられ感化せられ、当の佛教自身は、それによって世界

宗教として成立するに至った。世界宗教としての貫録をもつに至ったということは、「世界的な展開において、その宗教が宗教としての使命を果していった」ということである。そういうことは、先の釈迦牟尼佛陀の伝記の上に見られる「娑婆世界の主である梵天が説法を勧請したという事跡」、すなわち、全人類の要請、佛教の語でいう、「一切衆生の願楽」に佛教が応えていった、という意味であることは固よりである。

### 光明無量 壽命無量

歴史上でそういう展開を遂げたことの、まさしくの内容としての佛の本願が、光明無量・壽命無量というあり方で表わされていることを述べねばならぬと思う。さて佛典の言葉に従えば、「佛の本願とは、智慧の光明が無量であり、慈悲の壽命が無量であることである」という。智慧と慈悲とが無量であるということは、ただ、佛の性格が、宇宙論的に全知 (omniscience) であり、時間の上で超越的な永劫 (eternal) であるという形而上的な存在性を表示するものではない。本願の智慧は、世界全域の凡ての人々の迷妄を打ち破らねばならないもの、そして慈悲は、そういう智慧のはたらきが、世界人類のあらん限りの、無限の歴史をきわめて、きわめられていかねばならない、ということである。そういう本願の動向が大乗佛教の本質である。それ故に大乗佛教とは、歴史上の或る段階において大乗佛教として出来上った形態、従ってドグマ化して存在しているというものではない。大乗佛教の本質は、光明無量・壽命無量なる本願の動向である。

### 大乗佛教と 現代の問題

ところでそういう大乗佛教は現代という世界的な段階において、宗教の使命を果しうるのであるろうか。少くとも、そういう使命を果しうる原理が大乗佛教に用意せられてあるのであろうか。

ということがここに問題として提起せられるであろう。わたくしはそれについて、インド文化の黄金時代といわれる紀元四―五世紀の、グプタ王朝という時代に在世した、サンスクリットで Vasubandhu 中国訳して「世親」の所論に關説したい。その世親という人は、当時、広い幅と種々多様な思想的諸要素に於いて与えられていた大乗佛教を、思想的に体系づけた偉大な思想家であるが、彼は、今、提起せられるであろうような問題についていう。

大乘佛教者すなわち菩薩たる程の人は、正覚の道としての佛教を愈々学修しなければならぬと同時に、彼は、その時代の諸科学をも学修しなければならない。

と。その言葉を少しく敷衍していふならば、先に述べた如く、佛教は過去の歴史において、人間の文化、科学に對立して立つたことは一度もなかった。それは、その時代の科学を離れて人間存在は考えられないからである。現代にあつては特にそうであろう。しかし、現代の科学文明が、人間の上に、愛着と憎恨との幾重にもからまり合つた迷妄を増大してやまないならば、佛教は、人間がそういう迷妄から解脱する道、正覚への道を明確に指示しなければならぬであろう。それをしないならば、先の釈迦牟尼佛陀の伝記の中で、梵天という神様が釈迦牟尼佛陀に訴えた如く、そこには、人類の大変な腐敗と破壊とがもたらされる他ないことになるからである。そのようにして、佛陀時代にあつての、佛教の問題が、そのまま紀元五世紀の世親當時の佛教の問題でもあり、また、今の世代の問題でもあることになるのである。

### 正覚の道と諸科学とは 矛盾しない↓中道

さて、世親は、直前に述べたような言葉を述べたその同じ場所で、菩薩の実践道において佛教の正覚の道と、諸科学を学修する道とが、同じ主体の中で矛盾なく実践せられ統一せられ、それによって大乘佛教の完成が期せられる道、すなわち、大菩提を成就してゆく実践道・佛道の体系を論述している。

おもうに正覚の道とは、人間性を否定する無の道であり、諸科学は人間性肯定の上に立つた有の道であるが、その有無の二つの道が矛盾なく自己同一的に成就せられ統一せられていく道こそが、佛教の中道である。中道とは、みなもと、佛陀が梵天の勸請にほだされて、始めてベナレス郊外に於いて説法を開始されたときに提唱せられた道であつたが、世親の体系づけた大乘菩薩道は、その中道を最も整うた仕方によって展開したものであつた。

そのようにして、紀元五世紀の世親によって指示された佛教学修の道は、そのまま、現代のわれわれの道を指示し



ているとおもう。

### 浄土教の位置づけ

終りに一言、つけ加えておきたいことがある。それは世上屢々、日本の学者によっても外国の学者によっても、浄土教が佛教の本流を展開するものでないように論じられることである。しかし、世親によれば、無量寿經の浄土思想は、本願としての大乗菩薩行が窮められた態である、と理解せられている。浄土真宗の親鸞という人の親鸞という名は、今いう世親の親という一字を頭におき、世親の中国における一註釈者曇鸞、という人の鸞の字を下につけたもので、親鸞が、その世親の大乗菩薩道の体系を継承し相承していることは、言うを待たない。

わたしは、大乗菩薩道の体系のそれらの点を、数年前、三人の学友との共著「佛教学序説」（平楽寺書店）の第四章に於いて、委細に叙述したのであるが、今は固より、それについての輪郭を与える他なかったのである。

（本稿は去る一月二十四日朝五時半、NHKの宗教放送の時間に、全国放送としておこなわれた講演の筆録である）